81　ほととぎす　鳴きつる方を　眺むれば　ただ有明の　月ぞ残れる

藤原実定



〈声に出してよんでみよう〉

ホトトギス　ナキツルカタオ　ナガムレバ
タダアリアケノ　ツキゾノコレル

月

＊ワ行オ段の「**を／ヲ**」は、古語では［wo］と発音されていました。11世紀初め頃、ア行オ段の「**お／オ**」が［o］から［wo］に変化したため両者の発音の区別が失われ、さらに17～18世紀頃、両者ともに［o］と発音されるようになり、現在に至っています。

＊この歌の第一音は「ホ」、そう、「**む・す・め・ふ・さ・ほ・せ**」の１つ、**１字決まり**、**１枚札**です。かるた競技の際には、この第一音を聞いただけで、下の句の札が取れるように、トレーニングを積んでくださいね！

〈どんな意味だろう〉

ほととぎすが鳴いた、その方向に目を向けると、（ほととぎすの姿はもうなくて）
ただ有明の月だけが残っているのだった・・・。

＊「ほととぎす」は、３月から５月にかけて日本に渡ってくる鳥の名です。初夏の訪れを告げる鳥として「時鳥」とも表記され、歌にもよく採り上げられています。平安時代にはその「初音」（季節に初めて鳴く声）を聴くことがブームにさえなっていました。

＊「有明の月」は、陰暦二十日過ぎ、夜が明ける頃になってもまだ空に残っている月を言います。

〈解説〉

「暁聞郭公（あかつきにほととぎすをきく）」という題で詠まれた歌です。

平安時代の貴族たちにとって、夏のはじめに飛来するホトトギスは、季節の訪れを象徴する鳥として、とても詩的で魅力的だったようです。特にホトトギスの第一声（初音）を聴くのは、非常に典雅なこととされました。そこで、それをなんとか聴くために、夜を明かして待つこともよく行われていたのだそうです。しかも、ホトトギスは動くのがとても速いということです。この歌の作者が、鳴き声のした方向に目を向けても、そこにもうホトトギスの姿はなかった、というのは、十分あり得る話だそうです。そこに残されているのは、ただ有明の月の光だけ・・・。

現実を忘れ、平安時代の夏の夜明けに、タイム・スリップしたような気持ちにさせてくれる歌ではないでしょうか。

〈作者と出典〉

作者の藤原実定（1139-1191）は、平安時代末期の歌人です。『百人一首』の撰者の藤原定家は、いとこにあたります。

この歌の出典は、７番目の勅撰和歌集（天皇の命令で編集された和歌集）である『千載和歌集』（1187 成立）です。



ホトトギス

写真提供：国立曽爾青少年自然の家・日本野鳥の会奈良県支部

http://soni.niye.go.jp/kinrin/yatyou/yatyou_itiran.html